三つの宝

芥川龍之介 著

三つの宝

芥川龍之介著

冨山房ギフト・ブックス

—みなさんと著者—

芥川竜之介は明治25年，東京の京橋入船町に生まれました。
東京大学英文科を卒業した後，生涯（しょうがい）小説家として，たくさんのすぐれた作品を書き，多くの人びとに読まれ，読み継がれてきましたが，それらの作品はいまもって，芥川竜之介全集<岩波書店>となってまとめられたものや，作品集としていくつかの出版社から出されています。
——芥川竜之介は，昭和2年に，36歳でなくなってしまいました。

（編集部）

<富山房ギフト・ブックス>

三つの宝

昭和36年11月1日印刷
昭和36年11月5日発行

定価 400円

著者■芥川龍之介
発行者■坂本起一

本文・株式会社真珠社
東京都千代田区神田神保町1の69
カバー・口絵・株式会社集美堂
東京都千代田区神田錦町2の9
製本・有限会社篠崎製本所
東京都文京区江戸川町9

発行所 合資会社 富山房
東京都千代田区神田神保町1の3
振替口座・東京 54529
電話・千代田局 (291) 2171—8

©落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

Printed in japan, 1961

この本を読む手だすけに

——著者から読者へ贈ることばに代えて

芥川龍之介は、わたくしと同じ年の生まれで、わたくしたちが二十二・三のころからのよい友だちであった。今いたらわたくしと同じく、もう七十になっているのだが、惜しいことに、何を思ったものか、三十六という若さのわが身を我と殺してしまった。それでここにはわたくしが、生き残っている友人として、彼に代わってこの文を書くこととなったものである。

芥川は、たれしも知っているとおり小説を書く人で、いつも理詰めの小説であったが、もともと詩人で、ありあまるほどの空想力の、小説からはみ出すもののはけ口を童話のなかに生かしてつかい、楽しんで童話を書いた人であった。

彼にはじめて童話を書かした人は、彼と同じく夏目漱石の門人で、彼には兄弟子に当たる鈴木三重吉であった。三重吉が「赤い鳥」という理想的な少年雑誌をはじめるにあたって、りっぱな新しい童話を書けそうな人をさがした末に、この人ならばと見込んだのが芥川であった。

芥川は三重吉の見込みどおり、三重吉のためにすぐれた童話を幾つか書いてから、童話を作ることのよろこばしさをおぼえて、その

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

後は自分から進んで童話を作る人のひとりになった。

ここに集められているものは、彼が自分から好んで童話を作るようになった比較的後年の作品だけに、なだらかにすなおな文章と、おもしろい筋立てのある手がたいもので、彼のほかの文学作品同様にすぐれたできばえは、四十年以上も経た今日でも、まだ新しく生きのいい味がある。さすがに芥川のものである。

もし生きていて自分でこれを書けば、もっとおもしろく、いろいろと書くこともあったろうものを……。わたくしには、とうていその代理はつとまらない。

一九六一年　庭の雞頭花を見ながら

佐藤春夫

内容目次

この本を読む手だすけに……1
——著者から読者へ贈ることばに代えて
白……7
蜘蛛（クモ）の糸……27

魔術……37
杜子春（とし）……57
アグニの神……83
三つの宝……107
この本の絵を見る手だすけに……127
——画家から読者へ贈ることば

カバー
口絵

木内広

白

1

ある春の昼過ぎです。白という犬は、土をかぎかぎ、静かな往来を歩いていました。狭い往来の両側にはずっと芽をふいた生けがきが続き、そのまた生けがきの間には、ちらほら桜なども咲いています。白は生けがきに沿いながら、ふとある横町へ曲がりました。がそちらへ曲がったと思うと、さもびっくりしたように、とつぜん立ち止まってしまいました。

それも無理はありません。その横町の十二・三メートル先には、印ばんてんを着た犬殺しが一人、わなを後ろに隠したまま、一匹の黒犬をねらっているのです。しかも黒犬は何も知らずに、この犬殺しの投げてくれたパンか何かを食べているのです。けれども白が驚いたのはそのせいばかりではありません。見知らぬ犬ならばともかく、今犬殺しにねらわれているのは、お隣の飼い犬の黒なのです。毎朝顔を合わせるたびにお互いの鼻のにおいをかぎ合う、大の仲よしの黒なのです。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

白は思わず大声に、

「黒君！　あぶない！」と叫ぼうとしました。が、その拍子に犬殺しはじろりと白へ目をやりました。

「教えてみろ！　貴様から先へわなにかけるぞ」

――犬殺しの目にはありありとそういうおどかしが浮かんでいます。白は余りの恐ろしさに、思わずほえるのを忘れました。いや、忘れたばかりではありません。一刻もじっとしてはいられぬほど、臆病風（おくびょうかぜ）が立ちだしたのです。白は犬殺しに目を配りながら、じりじりあとずさりを始めました。そうしてまた生けがきの陰に犬殺しの姿が隠れるが早いか、かわいそうな黒を残したまま、一目散に逃げだしました。

そのとたんにわなが飛んだのでしょう。続けざまにけたたましい黒の鳴き声がきこえました。しかし白は引き返すどころか、足を止めるけしきもありません。ぬかるみを飛び越え、石ころをけちらし往来どめのなわをすり抜け、ごみための箱を引っくり返し、振り向きもせずに逃げ続けました。ごらんなさい、坂を駆けおりるのを！そら、自動車にひかれそうになりました！　白はもう命の助かりた

さに夢中になっているのかもしれません。いや、白の耳の底には、いまだに黒の鳴き声がアブのようになっているのです。

「キャアン、キャアン。助けてくれえ！　キャアン、キャアン。助けてくれえ！」

2

白はやっとあえぎあえぎ、主人の家に帰ってきました。黒べいの下の犬くぐりを抜け、物置き小屋を回りさえすれば、犬小屋のある裏庭です。白はほとんど風のように、庭裏のしばふへ駆けこみました。もうここまで逃げてくれば、わなにかかる心配はありません。おまけに青あおしたしばふには、幸いお嬢さんやぽっちゃんもボール投げをして遊んでいます。それを見た白のうれしさはなんといえばいいのでしょう？　白はしっぽを振りながら、一足飛びにそこへ飛んで行きました。

「お嬢さん！　ぽっちゃん！　きょうは犬殺しに会いましたよ」

白はふたりを見上げると、息もつかずにこう言いました。（もっと

もお嬢さんやぼっちゃんには犬のことばはわかりませんから、ワンワンと聞こえるだけなのです）しかしきょうはどうしたのか、お嬢さんもぼっちゃんも、ただあっけにとられたように、頭さえなでてはくれません。白は不思議に思いながら、もう一度ふたりに話しかけました。

「お嬢さん！　あなたは犬殺しをご存じですか？　それは恐ろしいやつですよ。ぼっちゃん！　わたしは助かりましたが、お隣の黒君はつかまりましたぜ」

それでもお嬢さんやぼっちゃんは、顔を見合わせているばかりです。おまけにふたりはしばらくすると、こんな妙なことさえ言いだすのです。

「どこの犬でしょう？　春夫さん」

「どこの犬だろう？　ねえさん」

どこの犬？　こんどは白の方があっけにとられました。（白にはお嬢さんやぼっちゃんのことばも、ちゃんと聞きわけることができるのです。われわれは犬のことばがわからないものですから、犬もやはりわれわれのことばはわからないように考えていますが、実際

はそうではありません。犬が芸を覚えるのはわれわれのことばがわかるからです。しかしわれわれは犬のことばを聞きわけることができませんから、闇の中を見とおすことだの、かすかなにおいをかぎ当てることだの、犬の教えてくれる芸は一つも覚えることができません)

「どこの犬とはどうしたのです？　わたしですよ！　白ですよ！」

けれどもお嬢さんはあいかわらず気味悪そうに白をながめています。

「お隣の黒の兄弟かしら？」

「黒の兄弟かもしれないね」

ぼっちゃんもバットをおもちゃにしながら、考え深そうに答えました。

「こいつもからだ中まっ黒だから」

白は急に背中の毛が逆立つように感じました。まっ黒！　そんなはずはありません。白はまだ小犬の時から、牛乳のように白かったのですから。しかしいま前足を見ると、――いや、前足ばかりではありません。胸も、腹も、あと足も、すらりと上品にのびたしっぽも、

みんななべ底のようにまっ黒なのです。まっ黒！　まっ黒！　白は気でも違ったように、飛び上がったり、はね回ったりしながら、一生懸命にほえたてました。

「あら、どうしましょう？　春夫さん。この犬はきっと狂犬だわよ」

お嬢さんはそこに立ちすくんだなり、今にも泣きそうな声を出しました。しかしぽっちゃんは勇敢です。白はたちまち左の肩をポカリとバットに打たれました。と思うと二度めのバットも頭の上へ飛んできます。白はその下をくぐるが早いか、もときた方へ逃げだしました。けれども今度はさっきのように、一町も二町も逃げだしはしません。しばふのはずれには、シュロの木のかげに、クリーム色に塗った犬小屋があります。白は犬小屋の前へくると、小さい主人たちを振り返りました。

「お嬢さん！　ぽっちゃん！　わたしはあの白なのですよ、いくらまっ黒になっていても、やっぱりあの白なのですよ」

白の声はなんともいわれぬ悲しさと怒りとに震えていました。けれどもお嬢さんやぽっちゃんにはそういう白の心もちものみこめるはずはありません。現にお嬢さんは憎らしそうに、

「まだあすこにほえているわ。ほんとにずうずうしい野良犬ね」
などと、地だんだを踏んでいるのです。ぼっちゃんも――ぼっちゃんは小道の砂利を拾うと、力いっぱい白へ投げつけました。
「畜生まだぐずぐずしているな。これでもか？　これでもか？」
砂利は続けざまに飛んできました。なかには白の耳のつけ根へ、血のにじむくらいに当たったのもあります。白はとうとうしっぽを巻き、黒べいの外へ抜け出しました。黒べいの外には春の日の光に銀の粉を浴びたモンシロチョウが一羽、気楽そうにひらひら飛んでいます。
「ああ、きょうから宿無し犬になるのか？」
白はため息をもらしたまま、しばらくはただ電柱の下にぼんやり空をながめていました。

3

お嬢さんやぼっちゃんに追い出された白は東京中をうろうろ歩きました。しかしどこへどうしても、忘れることのできないのはまっ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com